

北海道近海の近代海獣猟業の統計と関連資料

斜里町立知床博物館 宇仁義和

099-4113北海道斜里郡斜里町本町49番地

斜里町立知床博物館

e-mail:uni@ohotoku26.or.jp

はじめに

北海道では、先史時代から鯨類や鰭脚類、ラッコなどの海獣を対象とした捕獲が行われてきた。近代以降は、規模は小さいながらも地域を特徴づける産業として注目され、新聞記事や読み物で紹介された（戸川，1951；菊池，1973など）。

しかし、資料的裏付けを持った報告は少なく、捕鯨の総括的な紹介（板橋，1989）、小型捕鯨の人類学的考察（フリーマンら，1989）、ラッコ・オットセイ猟業の資源管理の歴史（和田，1997）、海獣猟業全般の紹介（宇仁，2000）などでも統計の根拠が明瞭に示されなかったり、引用資料が適切とはいえない事例もあった。一方、農林省統計を用いた日本全体の海獣の捕獲状況の紹介（Ohsumi，1972）では、資料的制限もありラッコや鰭脚類は扱われず、北海道周辺の地域的特徴までは分析されなかった。

本稿では、主に開拓使や北海道庁、農商務省の公式統計や報告書を用い、猟業の対象動物ごとに捕獲に関する統計を作成した。加えて、北海道に現存する関連資料について、知り得た範囲で所在と内容を記載した。

この報告をまとめるにあたり、水産庁中央水産研究所の竹内賢士課長には、政府関係の重要文献を教えていただいた。加えて次の機関や個人にお世話になった。記してお礼申し上げる（順不同、敬称略）。

（財）日本鯨類研究所、水産庁中央水産研究所、北海道大学水産学部図書館、同水産資料館、北海道立文書館、北海道立図書館、網走市立図書館、網走市立郷土博物館、紋別市立郷土博物館、根室市郷土資料保存センター、釧路市立図書館、厚岸町海事記念館、厚岸町情報館、浜中町役場、浜中町教育委員会、斜里町立図書館、寺田弘、鈴木安

太郎、鈴木貴美子、三好浩治、三好英志、下道吉一、川上 淳、川口昭二、鈴木芳光、井田 宏、藤井豊春、加藤秀一、加藤婦佐枝、大島陽、大隅清治。

なお、この研究は日本科学財団笹川科学研究助成を受け行われた。

資料と方法

北海道と千島列島、1908-45年の日本統治時代の南サハリン（以下、樺太と記す）の近海で、明治期以降に行われた捕鯨と海獣猟業について、この地域独自の統計や資料を調べ、捕獲に関する統計を作成した。

この海域で操業される海獣を対象とする猟業は、現在の制度では、大臣許可漁業の小型捕鯨業、海区漁業調整委員会の承認を必要とするイルカ漁業、その他の猟業を含む自由漁業に区分けされる。過去には、大型捕鯨業、ラッコ・オットセイ猟業が存在した。

本論では、北海道近海で行われた海獣の猟業を大型捕鯨、小型捕鯨、イルカ漁業、ラッコ・オットセイ猟、アザラシ猟、トド・アシカ猟、その他に区分けし、既存の報告を紹介し、捕獲に関する統計を作成した。考察は、調査で明かとなった捕獲統計と既存の報告について検討した。

なお、海豹島でのオットセイの陸上捕獲および遠洋漁業によるラッコ・オットセイ猟業は簡単な報告にとどめた。

この調査で用いた資料は、『開拓使事業報告第参編物産』（大蔵省，1885）、『北海道庁勸業年報（11～14回は「拓殖年報」）』とその後身の『北海道庁統計書第二巻勸業之部』（北海道庁）、『水検統計—北海道の漁獲高と検査高二十箇年—』（北海道庁，1953）、『水産物検査統

計書』（樺太庁）、『北海道漁業現勢』（北海道）と1960年発行分（昭和33年版）からはその後身の『北海道水産現勢』（北海道）、『一九四〇年の漁業実績—特別委員会報告書—』（日本海洋漁業協議会、1951）、『第二回水産博覧会審査報告』（農商務省、1899）、「日本捕鯨協会捕獲統計簿自明治四十四年現在至ル」（日本捕鯨協会、1944）である。

調査した統計の多くは、数量と金額の両方が記載されていたが、原則として数量のみの報告とした。また動物名が漢字で表記されていた場合は、必要のない限りカタカナになおして記述した。

また戦前の統計書は、属人か属地かの区別は明記されていないが、遠洋漁業関係は属人、その他は属地と判断した。戦後の統計は、属地統計である魚種別統計を主に利用した。

結果

調査した統計書に記録された海獣の産出は、クジラ、イルカ、ラッコ、オットセイ、アザラシ、トド、アシカ、その他であった。しかし、海獣に関する記録そのものが少なく、また項目名や単位、地域区分が一定しておらず単純な集計や比較が困難な部分が多かった。そのため統計を表で示すことができた部分は一部であり、文章で表現した部分も多くある。

以下、猟業別に記述する。

1) 大型捕鯨

大型捕鯨については、「日本捕鯨協会捕獲統計簿自明治四十四年現在至ル」で根拠地別の捕獲統計が記載される1925年（大正14）以前の記録、あるいはそこに記載のない事項のみ報告する。

・既存の報告

北海道における近代の捕鯨は天塩国（現在の留萌支庁）増毛郡で事業着手しされたのが始まりで3年で中止された（北水協会、1935）。捕獲方法は記録されていない。実際に捕鯨事業が継続して行われたのは石川県出身の斎藤知一などが中心となり、1887に現在の苫前郡羽幌町で始めた網取式捕鯨が最初であった（北水協会、前出；中村、1985）。捕獲頭数は全道一括の記録で、1870-72年に18頭、1884-86年に4頭、1887年4頭、1888年5頭、1889年30頭という（北水協会、前出）。

ノルウェー式捕鯨は、1910年（明治43）様似町で操業したのが最初の記録で、ノルウェー人砲手を雇い、この年の6月までにマッコウクジラ1頭、ナガスクジラ26頭を捕獲したという（様似町、1962）。しかし、これは短期間で終了し、本格的な事業は、東洋捕鯨が太平洋側の室蘭に事業所を設置したことに始まった（板橋、前出）。

・統計

この猟業に関する統計は1873-81年は『開拓使事業報告第参編物産』、1886-93年と1899年は『北海道庁勤業年報』、1913-17年は『北海道庁統計書第二巻勤業之部』に記録されていた。

項目名は、1873-81年は「寄鯨」であり、1874年のみ「鯨」があった。1886-93年と1899年は「塩鯨」の産出として記録され、1886年のみ「寄鯨」の項目があった。その後項目は一時途絶え、1913-17年は郡別鯨種別の記録があった。

1873-81年の「寄鯨」は国郡別に記録され、最大の産出地は天塩国（現在の留萌支庁）であった（表1）。1874年の「鯨」は胆振国の記録で41,432石が産出された。

1886-93年と1899年の「塩鯨」は、1886-88年は国別に、1889-93年と1899年は国郡別に記録され最も産出が多かったのは苫前郡であった（表2）。1886年の「寄鯨」は北見国と天塩国で記録されていた。

また、苫前郡の捕鯨記録については『第二回水産博覧会審査報告』に捕獲状況が記録されていた。それによると、1889-96年の9年間に147頭の捕獲記録があった。年別の捕獲数は、1889年ザトウクジラ（坐頭）コククジラ（児鯨）等30頭、90年ゴンドウ（巨頭）9頭コククジラ28頭計37頭、以降は頭数のみの記録で91年12頭、92年15頭、93年16頭、94年21頭、95年13頭、96年16頭であった。

1913-17年の郡別鯨種別の統計は、実質的に事業所別の捕獲統計であり、船数やトン数、乗組員数、従業員数、販売金額が記録される詳しいものだった。ここでは支庁別種別で集計した（表3）。なお、この統計は「日本捕鯨協会捕獲統計簿自明治四十四年現在至ル」とは異なった数字になっていた。

その他の項目として、1889-1901年にかけて「鯨油」があったが、散発的で数量も小さいものだった。

表1. 開拓使時代の寄鯨の産出 (石数)

北見天塩合計産出郡名	北	見	天	塩	合	計	産出郡名
1873	0	1,710	1,710	増毛			
1874	11,584	4,800	16,384	枝幸、増毛、苫前			
1875	0	18,000	18,000	増毛			
1876	0	7,575	7,575	留萌			
1877	0	3,000	3,000	留萌			
1878	0	4,166	4,166	天塩			
1879	15,489	0	15,489	枝幸、宗谷			
1880	0	7,650	7,650	留萌			
1881	48,021	31,700	79,721	札文、枝幸、宗谷、留萌、天塩			

表2. 北海道庁時代の塩鯨の産出 (石数) (頭数)

十勝釧路千島北見天塩合計産出郡名	十勝	釧路	千島	北見	天塩	合	計	産出郡名
1886			32,250	27,700	59,950	郡名記載なし(寄鯨)		
1887	4,875			150,000	154,875	郡名記載なし		
1888	23		25	140	188	郡名記載なし		
1889	75			500	575	苫前、厚岸		
1890				1,960	1,960	苫前		
1891				420	420	苫前		
1892			90	325	415	苫前、宗谷		
1893			280	2,352	2,632	苫前、宗谷、斜里		
1899		2,887		4,000	6,887	苫前、養取		

出典：北海道庁勸業年報および第2回水産博覧会審査報告
1886年の項目名は「寄鯨」

た。

2) 小型捕鯨

・既存の報告

小型捕鯨業は1947年(昭和22)までは自由漁業として行われていたため、それ以前の実態について詳細な報告は見られなかった。

戦後は、本州や九州の企業体が乙部、羽幌、稚内、紋別、網走、標津、釧路、様似などを陸揚げ港として操業していた(竹内, 2000)。北海道沿岸で、1948-51年までに捕獲されたのは、オホーツク海・太平洋・日本海ではミンククジラ、ツチクジラ、浦河を中心とする漁場ではシャチ、ゴンドウクジラ類だった(前田・寺岡, 1952)。

・統計

この漁業の統計は、1949-52年は『水検統計ー北海道の漁獲高と検査高二十箇年ー』、1952-1999年は『北海道漁業現勢』と『北海道水産現勢』に記録されていた。このうち1969年以降の統計は、鯨体処理場のあった市町村のみの記録となったの調査対象外とした。また、記録は大型捕鯨と小型捕鯨が統合された数字となっていた。

項目名は「鯨」または「くじら」で、1949-68年の水揚げは、石狩を除くすべての沿岸全支庁から記録され、当時の市町村名は、後志支庁が、余市、寿都；桧山支庁は、奥尻、乙部、上ノ国、熊

表3. 支庁別鯨種別捕獲頭数

室蘭区 (室蘭郡・東洋捕鯨株式会社)						
	ナガス	ザトウ	イワシ	マッコウ	その他	小計
1913	102		4			106
1914	79		5	1		85
1915	54		1	9	3	67
1916	12					12
1917	10			8		18

浦河支庁 (様似郡・中外水産株式会社)						
	ナガス	ザトウ	イワシ	マッコウ	その他	小計
1913						0
1914						0
1915	11		1	9		21
1916						0
1917						0

根室支庁 (根室・色丹・択捉郡の合計)						
	ナガス	ザトウ	イワシ	マッコウ	その他	小計
1913						0
1914	174	14	49	35	1	273
1915	126	26	86	13		254
1916	137	16	31	35	4	223
1917	140	4	169	21	1	335

網走支庁 (網走郡・東洋捕鯨株式会社)						
	ナガス	ザトウ	イワシ	マッコウ	その他	小計
1913						0
1914						0
1915	11					11
1916	127		4			131
1917	41			2		43

全道						
	ナガス	ザトウ	イワシ	マッコウ	その他	小計
1913	102		4			106
1914	253	19	50	35	1	358
1915	205	28	104	16		353
1916	276	20	31	35	4	366
1917	191	4	179	21	1	396

出典：北海道庁統計書第2巻勸業之部

石；渡島支庁は、砂原、森、八雲、尾札部、戸井、臼尻、松前、鹿部、南茅部；胆振支庁は、苫小牧、鶴川；日高支庁は、新冠、静内、様似、三石、浦河、幌泉；十勝支庁は、広尾；釧路支庁は、白糠、釧路、厚岸、浜中；根室支庁は、根室、羅臼、標津；網走支庁は、斜里、網走、紋別、興部、湧別；宗谷支庁は、稚内；留萌支庁は、留萌、遠別、羽幌、苫前、増毛であった。

水揚げが記録された市町村は、大型捕鯨の基地や小型捕鯨の処理場が存在した檜山、日高、釧路、根室、網走、宗谷、留萌の支庁(竹内, 2000)以外からも記録が得られ、とくに渡島支庁では継続した記録があった(表4)。

表4. 「鯨」または「くじら」の水揚げ

(1957年までは貫、1958年以降はkg)

	後志	檜山	渡島	胆振	日高	十勝	釧路	根室	網走	宗谷	留萌	合計
1949年	550	41,175	425			780	2,569,320		364,438			2,976,688
1950年		56,900	1,600		750		3,418,845		198,540		700	3,677,335
1951年		12,700	1,550	4,000	9,360	259	3,319,501		429,530	4,500	60	3,781,480
1952年		21,720	480			600	3,454,993		429,640	2,000	300	3,909,713
1953年		21,500	1,000		430		3,584,081	3,500	588,490			4,199,001
1954年	200		15,600		9,200	1,430	4,352,932	2,500	407,250			4,789,112
1955年	320		511		450		4,177,656	24,325	670,540		6,200	4,880,002
1956年			490	300			5,276,272	53,600	207,178		18,680	5,556,220
1957年		100	2,342	1,000		650	4,074,245	12,000	94,955		8,00	4,193,292
1958年			5,213				17,985,000	70,500	315,713		57,375	18,433,801
1959年			2,960		7,400	7,500	13,876,840		511,000	18,750		14,424,450
1960年			2,850	5,600	2,000		17,643,500		1,236,900		38,100	18,928,950
1961年							16,918,800		567,725		188,765	17,675,290
1962年							11,542,000		578,000		12,000	12,132,000
1963年							10,724,000		779,000			11,503,000
1964年							10,351,000		923,000		6,000	11,280,000
1965年	1,900				2,000		8,922,000		1,336,500			10,262,400
1966年			2,600		750		6,077,000		3,605,200			9,685,550
1967年			2,640		2,000	2,000	10,029,000		558,500	780,000	2,500	11,376,640
1968年							0	11,231,000	74,000	76,000		11,381,000

出典：北海道漁業現勢および北海道水産現勢

3) イルカ漁業

・既存の報告

北海道における近代のイルカ漁業は、戦時体制下の物資供給を目的としたイシイルカを対象にした突棒漁業として始められた。1937年（昭和12）に太平洋漁業株式会社が三陸地方の突棒船をチャーターした試験操業を行い、オホーツク海がおもな操業海域とされた（平島・大野，1944）。

戦後もイシイルカの突棒漁業は自由漁業として操業が続けられていたが、1989年の漁期から海区漁業調整委員会の承認を必要とするようになった。

なお、三陸地方のイルカ突棒漁業は、大正時代に千葉県房総半島から伝えられた（岩手県水産試験場，1955；大槌町漁業史編纂委員会，1983）。

・統計

この漁業に関する統計は、1941-42年と1944年の3年分が『北海道漁業現勢』に記録されていた。項目名は「海豚突棒」で、釧路支庁と網走支庁の2支庁での記録があった。しかし、釧路支庁は1941年の89貫のみで、あとはすべて網走支庁の記録で、1941年78,400貫（294トン）、1942年116,830貫（438トン）、1944年38,853貫（146トン）であった。

4) ラッコ・オットセイ猟

・既存の報告

北海道における近代のラッコ・オットセイ猟業は、1873年（明治6）から開拓使直営の官営ラッコ猟として始められた。事業主体は、1871-72年は開拓使の買上げ、1873-81年は開拓使直営、1882-85年は根室県を経て農商務省、1889-96年は帝国水産、1897-1911年は民間企業であった（大蔵省，1885；片山，1937）。

その後、1911年に日・米・英・露の4カ国の間で臘肭獣保護条約が締結され、同条約にあわせ1912年に臘肭獣臘肭獣猟獲取締法が制定公布されてからは、オットセイの海上捕獲と民間のラッコ猟は禁止された。一方、条約で許された沿岸3海里の範囲のラッコ猟が農林省直轄の中部千島開発事業に位置付けられ、少なくとも1929-40年に行なわれた（日本海洋漁業協議会，1951）。

同条約が1941年（昭和16）に失効した後は、1942年に臘肭獣臘肭獣猟獲取締法が一部改正され、大臣の許可を得た者の猟獲を認めた。具体的には軍需品生産を目的とした一種の統制会社である日本海獣株式会社と樺太海獣興業株式会社を設立し、サハリン東岸のチュレニー島（海豹島）での陸上捕獲は樺太海獣に、それ以外、つまり中部千島で

のラッコ捕獲事業とオットセイの海上捕獲は日本海獣に許可を与えた（海洋漁業協会，1942；日本海洋漁業協議会，前出）。

戦後はGHQの指令によりオットセイは禁猟とされ，1957年に新たにおっとせい保護条約が締結された。新条約は1988年にアメリカが批准しなかったことで失効したが，ラッコとオットセイの両種は，現在も臘虎臘肭獸猟獲取締法により捕獲が禁止されている。

・統計

この猟業に関する遠洋漁業を除いた統計は，1871-81年が『開拓使事業報告第参編物産』，1882-85年は『北海道庁勤業年報』（第1回），1889-96年は『第二回水産博覧会審査報告』，1929-40年と1943-45年は『一九四〇年の漁業実績—特別委員会報告書—』に記録されていた。

このうち，ラッコは，いずれも頭数で記録されていた。数量は1871-72年にアイヌからの買上げで145頭，1873-85年は官営ラッコ猟であり択捉島の4郡で2,153頭，1889-95年は帝国水産会社により千島列島沿岸で271頭，1929-40年に農林省中部千島開発事業によりウルップ島からオンネコタン島に至る中部千島で480頭，1943-45年に日本海獣株式会社によりウルップ島で201頭となり，遠洋漁業を除いた合計は3,250頭であった（表5）。

オットセイは1875-81年に札幌支庁と函館支庁で頭数の記録があった。札幌支庁では1878年47頭，1879年62頭，1880年147頭，1881年56頭，函館支庁では1875年127（90）頭，1876年8（8）頭，1877年198（46）頭，1878年352頭，1879年369頭，1880年131頭，1881年304頭だった（カッコ内は「ヲヲネツ」で内数）。期間中の合計は，札幌支庁312頭，函館支庁1,489頭（144頭）だった。

1897年の遠洋漁業奨励法制定以降の統計では，1906年から設けられた「遠洋漁業」の項目を除くと1897-1911年にラッコが83頭，オットセイは11，717頭が記録されていた。調査した統計書では「遠洋漁業」の項目では，動物種を区別せずに集計していた。

一方，1898-1911年の14年間に遠洋漁業奨励法による補助金を受けた漁船による猟獲数は，ラッコが939頭，オットセイが135,066頭（農商務省水産局，1913）という報告が得られた。

海約島での陸上捕獲の実績は1918-37年で

表5. ラッコの産出数

年	産出数	事業主体	捕獲地域など
1871	70	買上	不明
1872	75	〃	〃（開拓使の買上計145頭）
1873	298	開拓使	択捉島
1874	78	〃	〃
1875	250	〃	〃
1876	285	〃	〃
1877	343	〃	〃
1878	270	〃	〃
1879	211	〃	〃
1880	137	〃	〃
1881	77	〃	〃
1882	36	農商務省	国後・択捉・色丹の3島
1883	58	〃	〃
1884	45	〃	〃
1885	65	〃	〃（政府直営猟業合計2,153頭）
1889	51	帝国水産	ウルップ島以東シュムシュ島以南の各島
1890	47	〃	〃
1891	57	〃	〃
1892	54	〃	〃
1893	25	〃	〃
1894	15	〃	〃
1895	12	〃	〃
1896	10	〃	〃（帝国水産計271頭）
1929	5	農林省	ウルップ島以北オンネコタン島以南
1930	13	〃	〃
1931	6	〃	〃
1932	-	〃	〃
1933	21	〃	〃
1934	17	〃	〃
1935	101	〃	〃
1936	87	〃	〃
1937	90	〃	〃
1938	1	〃	〃
1939	83	〃	〃
1940	56	〃	〃（農林省中部千島開発事業計480頭）
1943	65	日本海獣	ウルップ島
1944	38	〃	〃
1945	98	〃	〃（日本海獣株式会社計201頭）
合計	3,250		

出典：開拓使事業報告第3編物産，第2回水産博覧会審査報告、北海道庁勤業年報、一九四〇年の漁業実績特別委員会報告

26,704頭という数字が得られた（木村金太郎，1940）。

1911年以後の捕獲記録は調査した統計書に少数ながら現れた。1941年の条約破棄後の捕獲数は正式な統計や政府発行の報告書には記載がないが，川上（1972）は1943年3,659頭，1944年3,701頭，1945年226頭の合計7,586頭と報告しており，Autin & Wilke（1950）も1943年に3,659頭としていた。

5) アザラシ猟

・既存の報告

北海道における近代のアザラシ猟は、開拓期には地場消費用の毛皮材料や灯油などへの利用（斜里町立知床博物館，1998）を目的に行われていた。

本格的な捕獲は代用皮革や工業原料として利用されはじめた戦時中のことで、サハリンでは先住民のウイльтаを射手に乗り込ませた母船式の猟獲、そして網猟が行われていた（犬飼，1942）。北海道では銃猟と網猟、そして撲殺による捕獲も行われていた（犬飼，前出）。また農商務省の中部千島開発事業でも捕獲されていた（日本海洋漁業協議会、前出）。

戦後は、1946年頃から油脂と食肉利用を目的にオホーツク海近海や根室海峡で操業が始められ、1949年頃に一時隆盛したが1952年頃から衰退した。その後1960年頃から毛皮目的の猟獲が高まり1965年頃から本格的生産体制に入った（内藤，1977）。その後、1977年の200海里経済水域設定と輸入原皮の値下がりから猟業は消滅した（宇仁，2000）。

・統計

この猟業に関する統計は、1870-81年が『開拓使事業報告第参編物産』、1882-1910年は『北海道庁勤業年報』に記録されていた。なお項目名は、種を区別せずアザラシ科の動物を一括したと考えられる「海豹」の項目で記録されていた。

1871-81年の統計は支庁別に頭数で記録され、この期間中の合計頭数は3,176頭だった。このうち根室支庁が3,170頭と大半を占め、最多の1877年には1,029頭が記録された。期間中、札幌本庁は4頭、函館支庁は1頭だった。

1882-86年の三県一局時代以降しばらくの間は断片的な記録となり、1882-85年は択捉島ラッコ猟場の記録で合計96枚、1897年は渡島国のみの記録で64枚、1899-1901年は千島国のみで合計40枚、1902-04年は釧路国、千島国、北見国で記録され、合計238枚、1906-07年と1918-20年は全道一括の集計のみで、それぞれ合計1,193枚と276枚だった。

なお、統計書では海獣皮の産出調査は1919年で終了した（北海道庁，1923）。

郡別の統計がまとまっていたのは1905年と1908-17年の11年間で、根室国の目梨郡、択捉郡、振別郡、紗那郡、薬取郡、国後郡、色丹郡；北見国の斜里郡、紋別郡、釧路国の厚岸郡；宗谷国の

枝幸郡と宗谷郡；渡島国の茅部郡、そして札幌区と小樽区で記録があり、年間100枚以上の記録は多い順に、1908年渡島国函館区の520枚、1905年の同区471枚、1915年宗谷支庁宗谷郡の260枚、1908年北見国斜里郡の150枚、1905年の同郡100枚、1917年宗谷支庁枝幸郡の100枚だった（表6）。

その後、1929-40年の農林省中部千島開発事業の記録（日本海洋漁業協会，前出）にアザラシの項目があったが、トドと統合されていたため後述する。

戦後の猟獲については、アザラシと明記した統計項目は得られなかった。一方、民間企業が農林省に提出した猟獲成績（日本冷蔵，1948）や生物学調査の報告（内藤，1971；Naito & Konno，1979）に、具体的猟獲数と見なせる記録があった（表7）。

樺太では、『水産物検査統計書』（樺太庁）に1934-36年の統計が記録されていた。産出地域は、敷香、元泊、豊原、大泊、本斗の各支庁で、オホーツク海側と宗谷海峡、日本海側南部の支庁で記録があった（表8）。最大捕獲数は、1936年の敷香支庁で946頭だった。

なお、樺太での猟獲数については犬飼（1942）が、1941年に敷香の1隻のアザラシ猟船が5月から6月中旬にゴマフアザラシ620頭、ワモンアザラシ466頭、アゴヒゲアザラシ150頭、クラカケアザラシ34頭、合計1,270頭を捕獲したと報告していた。

6) トド・アシカ猟

・既存の報告

北海道でオットセイを除くアシカ科の動物を対象とした専門の猟業が成立した記録は見られなかった、しかし、農林省の中部千島開発事業では捕獲されており（日本海洋漁業協議会，前出）、戦時には軍需食料や皮革の調達を目的とした猟獲が択捉島を中心に行われ（宮武，1943）、実用新案特許を得た爆薬を用いた捕獲方式が用いられた（内田，1949）。

トドに関しては、国内では1959（昭和34）以降、漁業被害防止を目的とした駆除が続けられ、駆除記録は1961-92年の間に22,481頭にのぼった（和田ら，1999）。駆除個体は自家消費のほか、観商業利用が行われている。

表6. アザラシ皮の産出

										(枚数)	
札幌	小樽	渡島	函館	釧路	根室	千島	北見	(網走)	宗谷	合計	産出郡名
1905			471	5	10	152	(100)			638	斜里、常呂、厚岸、色丹、択捉、紗那
1908	17		520		7	15	150	(150)		709	斜里、目梨、色丹、択捉
1909				10	23	30	20	(20)	7	90	斜里、厚岸、目梨、色丹、択捉、振別、薬取、枝幸
1910						21	15	(15)		36	斜里、国後、色丹、択捉、薬取
1911						26	8	(8)		34	斜里、国後、色丹、択捉、振別、薬取
1912						40	10	(9)		50	斜里、紋別、国後、色丹、択捉、振別、紗那、薬取
1913				5		66	48	(48)	2	121	斜里、厚岸、国後、色丹、択捉、振別、紗那、薬取、枝幸
1914				20		53	52	(52)	7	132	斜里、厚岸、国後、色丹、択捉、振別、薬取、枝幸、宗谷
1915	30	55	1	10		31	2		264	393	紋別、厚岸、択捉、振別、紗那、薬取、枝幸、宗谷、茅部
1916				7		58	6		100	171	紋別、厚岸、択捉、振別、紗那、薬取、枝幸
1917						77	20	(20)	50	147	斜里、国後、択捉、振別、紗那、枝幸
1918					97		40		3	140	郡名記載なし
1919					67		5			72	々
1920				4	56		4			64	々

出典：北海道庁勲業年報および北海道庁統計書第2巻勲業之部、統計書では支庁・区別に記録。郡名により根室支庁管内から南千島を区分けた

表7. アザラシの具体的獵獲数(頭数)

出典	期間	操業海域	捕獲数	内容
日本冷蔵、1948	1948年3月27日-4月25日	サハリン南東沖	484	ワモン152、ゴマフ285、クラカケ43、アゴヒゲ4
々	1948年3月26日-4月23日	北海道紋別沖	373	ワモン107、ゴマフ242、クラカケ22、アゴヒゲ2
内藤、1971	1968年の毛皮工場入荷数	オホーツク海域	1325	ゴマフ795、クラカケ400、ワモン128、アゴヒゲ2
々	々	根室海峡	約1,000	ゴマフ約260、クラカケ約680、ワモン約60
々	々	太平洋沿岸	150-200	ゼニガタ約150-200
Naito, 1979	1975年5月1日-6月4日	サハリン東沖合	1151	ゴマフ390、クラカケ761

表8. 樺太でのアザラシ皮産出枚数 (枚数)

	敷香	元泊	豊原	大泊	留多加	本斗	合計
1934	440	129	127	522		46	1,264
1935	463	180	130	427	350	136	1,686
1936	946	165	89	492	252	74	2,018

出典：水産物検査統計書(樺太庁)、留多加は出張所の記録

・統計

この獵業の統計は、1875-81年が『開拓使事業報告第參編物産』に、1889-93年と1897-1908年は『北海道庁勲業年報』と『北海道庁統計書第二巻勲業之部』に、1929-40年と1943-45年は『一九四〇年の漁業実績-特別委員会報告書-』に記録されていた。

1875-1881年の統計は支庁別に記録され、この期間中に根室支庁で肉が1,060頭、皮が4,210枚が産出された。札幌本庁は19頭、函館支庁は83頭だった。産出郡名は根室支庁の花咲郡以外の記載はなく、1875-78年までの根室支庁の皮の産出枚数は100枚単位で記録されていた。

1889-93年と1897-1908年の項目名は「海驢」、1909-12年は「海驢」と変わらないがその数に含まれた「海馬」を注記で示し、1913-14年は「海馬」で「海驢」を注記で示し、1915-18年は「海驢」「海馬」の両方の項目が設けられ、1919年は再び「海

表9. アシカ皮の産出 (頭数, 枚数, 石)

年代	後志/北見	渡島	釧路	根室	千島	合計	産出郡名および単位
1889		14					松前、上磯
1890		1,400				1,400	松前、上磯(石数)
1891		5			90	95	松前、択捉
1892		16				16	松前、上磯
1893		16				16	松前、上磯(以上頭数)
1896		130				130	郡名記載なし(以後枚数)
1897		1,325			20	1,345	
1898							
1899		80				80	松前
1900		72			55	127	松前、振別、薬取
1901		135			126	261	松前、択捉、紗那
1902		223			89	312	松前、択捉、色丹
1903	20	100			30	150	松前、寿都、色丹
1904		120		10	9	140	松前、厚岸、野付、択捉
1905	1	48			56	105	函館区、色丹、択捉、紗那、紋別

出典：北海道庁勲業年報および北海道庁統計書第2巻勲業之部

驢』に統合されていた。なお、統合は皮の産出枚数であった。地域区分は、1889-93年と1899-1905年および1908年の産出は郡別に、1897年と1918-19年は国別に、1906-07年は全道合計で記録されていた。以下、漢字表記をカタカナに直して記述する。

アシカは頭数または皮枚数で集計されていた。国郡別の記録がまとまって得られた1889-93年と1896-1905年の統計では、アシカは函館区、渡島国の松前と上磯、根室国の野付と択捉島の振別、薬取、択捉、紗那、釧路国の厚岸、後志国の寿都の各郡で記録されていた。そして、この14年間(1898年は統計がない)に、渡島半島南部の松前郡と上磯郡では2,182枚以上(1890年が石数の記録で合計を1枚と数えた)が記録され、1897年

表10. 「海獣」または「他海獣」の水揚げと金額

年	(1957年までは貫、1958年からはkg)											(円)				
	石狩	後志	渡島	胆振	日高	十勝	釧路	根室	網走	宗谷	留萌	合計	網走の%	網走の金額	合計の金額	網走の%
1949年			1,152	23	1,015	1,702	2,576		17,790	2,100	500	26,858	66	5,268,452	5,720,045	92
1950年		1,107	251	16	463	1,253	1,154	3,186	221,487			228,917	97	24,611,670	24,782,606	99
1951年		20		32	1,531	2,805	1,763	3,891	25,331			35,373	72	1,900,180	2,069,760	92
1952年		88			2,387	1,734	2,575	10,510	20,905		280	38,479	54	1,299,955	1,650,004	79
1953年				367	3,046	1,010	5,840	10,588	24,000		62	44,913	53	3,164,300	3,621,828	87
1954年				282	1,844	259	2,976	1,188	21,500			28,049	77	4,025,000	4,246,882	95
1955年		700	136	4	433	440	780		16,000			18,493	87	3,200,000	3,257,060	98
1956年	12		256	30	391	196		902	9,340		120	11,247	83	1,089,000	1,185,862	92
1957年		13	105		380	144	1,700	7,480	14,850			24,672	60	1,645,000	3,285,385	50
1958年			12,120	1,290	4,046	1,204	3,750	3,000	112,650			138,060	82	3,016,000	3,587,792	84
1959年			911	2,190	3,435	220	750		28,287			35,793	76	637,327	712,592	89
1960年		230	850		5,870	2,221	40,100		59,971			109,242	55	1,520,236	2,052,861	74
1961年			5,100		1,171	1,160		117	108,557			116,105	93	2,441,195	2,570,535	95
1962年		30	195	370	122	1,759			27,577			30,053	92	477,083	492,000	97
1963年				47	408	1,798			13,675			15,928	86	237,025	243,000	98
1964年				90					17,753			17,843	99	562,266	565,000	99
1965年					596	2,385			8,400			11,785	71	983,800	997,000	99
1966年						1,870			6,000			7,870	76	600,000	605,590	99
1967年						90			3,500			3,590	97	350,000	350,270	100

出典：北海道漁業現勢及び北海道水産現勢

には1,325枚が産出された(表9)。またアシカとトドを区別して集計した1909-18年は合計505枚が記録され、1915年に札幌区で200枚、1914年に宗谷国で5枚、1918年に函館区で8枚、残りは根室国で択捉島を中心に合計292枚が記録された。

また、全道一括で記録されていた1906-08年は、1906年98枚、1907年1,150枚、1908年1,002枚だった。

トドは、アシカと区別された1909-18年に合計231枚が記録され、そのうちのほぼ半数の112枚は根室国の薬取、紗那、択捉、国後、色丹の南千島各部の産出だった。その他、宗谷、幌泉、松前、虻田の各郡から得られたがいずれも1-10枚で散発的な記録だった。

これ以後の統計では、1929-40年に農林省直轄の中部千島開発事業で「トド・アザラシ」が合計4,307頭が、1943-45年に日本海獣株式会社で「トド」が合計1,810頭の捕獲記録があった(日本海洋漁業協議会、前出)。

7) その他

戦後の北海道の魚種別統計には、種名を明記しない「海獣」あるいは「他海獣」という統計項目が独立して設けられていた。この項目は1949-52年は『水検統計—北海道の漁獲高と検査高二十箇年—』、1952-67年は『北海道漁業現勢』と『北海道水産現勢』に記録されていた。なお、魚種別

表11. 網走支庁での「海獣」または「他海獣」の月別水揚げ

年	(1957年は貫、以降kg)									4-6月%	
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	4-6月計	4-6月%			
1957	8,400	6,450					14,850	100			
1958	32,250	57,525	22,875				112,650	100			
1959	19,400	6,637	2,250				28,287	100			
1960	34,425	6,375	14,025	3,569	1,577		59,971	91			
1961	21,788	6,869	38,165	40,630		1,105	108,557	62			
1962	4,000	8,000	15,000		255		28,000	96			
1963	13,000			1,000			14,000	93			
1964	13,000	0	2,000	2,000	0		17,000	88			
1965	4,000	4,000					8,000	100			
1966	6,000						6,000	100			
1967	0						0	0			

出典：北海道漁業現勢及び北海道水産現勢

統計には並列して「鯨」あるいは「くじら」の項目があった。

「他獣」または「他海獣」が水揚げされた地域は檜山を除くすべての沿岸支庁で、当時の市町村名は、石狩支庁は石狩；後志支庁は小樽、余市、寿都、入舸；渡島支庁は砂原、八雲、尾札部、鹿部、上磯、白尻、南茅部；胆振支庁は浦幌、虻田、室蘭、苫小牧、伊達、鶴川；日高支庁は門別、新冠、三石、静内、荻伏、浦河、様似、幌泉；十勝支庁は広尾；釧路支庁は、白糠、釧路、厚岸、浜中；根室支庁は歯舞、根室、標津、羅臼、網走支庁は網走、紋別、興部；宗谷支庁は不明；留萌支庁は増毛、初山別であった。

地域別では網走支庁が約50-99%と大半を占め、最も多い1950年は221,487貫(約830t)で、1949-54年までは毎年20,000貫(約75t)以上を水揚げし、1958年と1961年には100t以上を水揚げした(表10)。次いで根室支庁からの記録が多く、釧路、十勝、日高の各市町がこれに続く。また昭和33年の1年限りだったが、渡島支庁でも1万貫(37.5t)

以上の水揚げされていた。また、月別に魚種別統計が記録された1957-67年の網走支庁の記録では、1961・1967年を除くと4-6月に水揚げの88-100%が集中していた(表11)。

考察

日本の漁獲統計は現在に至るまで漁業者の自己申告を基にしており、種別や数量が事実を反映したものかどうか疑問が残る。とくに今回の調査では行政の未整備だった時代の統計が対象であり、記録された数値をそのまま事実と考えることは困難である。しかしながら、他には海獣の捕獲頭数に関する統計資料はなく、ましてや生息数を示す客観的なデータなどまったく存在しない年代の資料であることから、当時の北海道周辺海獣の捕獲と生息状況についての傾向を一定程度表した唯一の記録として重要であると考えられる。

以下、個別に考察する。

1) クジラ

・苫前捕鯨場の捕獲種

第2回水産博覧会の記録では、1889年はコククジラ「兒鯨」とザトウクジラ「坐頭」等で30頭、1889年はゴンドウクジラ「巨頭」9頭とコククジラ「兒鯨」28頭(以後頭数記録のみ)で、少なくとも事業の初期は、現在絶滅に近いアジア系個体群のコククジラが主な捕獲対象種だったと考えられた。

・小型捕鯨

調査した統計書では、戦後の北海道では鯨体処理場のない場所でもクジラが市場に出荷されていたことを示していた。これは、北海道の広い範囲でクジラを利用されたことの反映と推測された。

北海道に設立操業していた捕鯨企業体は、網走市と貝取潤村(現・大成町)にあった(北海道労働科学研究所, 1950)。聞き取りによると貝取潤村の企業体は、日本水産の南氷洋砲手(竹内未発表)が和歌山県太地町から中古の捕鯨船を回航して始めたものといい、江差港を根拠に事業を行っていた。その操業の記録は、1950年に8頭(北海道労働科学研究所, 前出)という。

2) ラッコ

・千島列島でのラッコ捕獲数について

ラッコの捕獲数のうち、1929-40年と1943-45年の記録について性格と信頼性について考察する。

本稿で用いた記録は、農林省の公式統計ではないが、戦後日本が国際社会に復帰することをふまえて政府の指示で作成された報告書(海洋漁業協会, 前出)であり政府の公式の統計として扱える記録と考えた。

信頼性については、1929-40年に行われた農林省の中部千島開拓事業でのラッコ猟は、政府直轄事業であること、中部千島自体が民間漁業者を閉め出していたこと(日本海洋漁業協議会, 前出)、臘虎臘肭獣猟獲取締法が存在したことから、記録された捕獲数以外の密猟は少なかったと推測される。

1943-45年の日本海獣株式会社による猟獲については、戦時中のため無制限な乱獲があったとの推測が可能かもしれない。しかし、聞き取り調査では、年間捕獲頭数の目標上限100頭と定められていたこと、猟獲には監視のため警察官が同行したこと、戦争中のため燃料不足と千島水域での船舶の航行に制限があったこと、実際の航行が危険であったこと、さらに同社が捕獲したラッコ原皮は一括して埼玉県草加市にあった工場に送られていたことから、報告書の捕獲数以外の密猟は少なかったとも考えられた。

なお、実際の猟獲の大多数は用船によって行われ、オットセイの海上捕獲は三陸地方の突棒船が主役を占めたという。

3) オットセイ

・樺太海獣興業株式会社の捕獲数

公式統計の作製されなかった、あるいは戦災で失われた樺太海獣興業株式会社の捕獲数について、聞き取りができた。対象者は、同社の元豊原工場勤務者である。彼によると工場の処理能力から推測して、年間2,000頭程度が捕獲されていたという。

4) アザラシ類

・明治時代のアザラシの産出地

統計のアザラシの産出数のうち、函館区の520頭と471頭という記録はアザラシ類の分布と同地が遠洋漁業の基地であったことから、他地域での捕獲個体の記録と考えられた。よって年間100頭以上を産出した斜里郡と宗谷郡、継続して数十頭

を産出していた千島国が主産地と考えられた。

・1950年頃の網走でのアザラシの水揚げ状況

戦後の物資不足を補うため、網走では油脂と食肉利用を目的に盛んにアザラシが水揚げされたが、今回の調査では、戦後の統計にはアザラシの項目はなかった。

ところが、「他海獣」の項目に含まれる動物種は、捕獲状況からアザラシ類とイルカ類が多数を占めると考えられ、この点について北海道水産林務部企画調整課情報係に照会したが、古い資料のためこの項目に含まれる動物種はわからないという回答だった。

しかし、地域別水揚げ高では網走支庁が約50-100%と大半を占めていたこと、月別に魚種別統計が記録された1957-67年の網走支庁の記録では、4-6月に水揚げが集中していたことから、「海獣」はアザラシ科の動物が多数を占めると推測された。

仮に、網走で記録された「他海獣」がアザラシ類とすれば、1950年には生産者販売金額で24,611,670円に達したことになる（北海道、1953）。

なお、戦後の漁業別統計に現れる「海獣漁業」は、捕鯨業のみを含むと考えられた。

・毛皮生産目的のアザラシ猟

1960年代をピークに毛皮目的のアザラシ猟がオホーツク海近海から公海を猟場に操業していた（吉田、1977）。しかし、今回調査した統計では、これらの企業体の活動を裏付けることはできなかった。原因として、毛皮の原皮供給を目的としたアザラシ猟では、漁業市場を通さず生産者から加工業者に直接売買され、水産統計に記録されなかったと考えられた。

一方、農林水産省の「漁業養殖業生産統計年報」では、1969-76年に毎年1,000頭以上の「海獣類」（イルカ・クジラは別項目）が捕獲され、1975年には7,000頭弱にも及んでいた（吉池、1986）。網走支庁での捕獲が多いことから、この中にアザラシが多数含まれていた可能性がある。

・ゼニガタアザラシの捕獲

1908-17年の郡別統計に現れた厚岸郡の記録は、同地域がゴマファアザラシ主要な分布域から外れること、1970年頃までゼニガタアザラシの猟獲が大規模に行われていたこと（伊藤・宿野、1986）から、ゼニガタアザラシが含まれると考えられた。

5) トド・ニホンアシカ

・択捉島でのトドの大量捕獲

択捉島でのトドの捕獲数については犬飼（1968）が2万頭と報告しているが根拠を示しておらず、聞き取りでは、ウルップ島で駐在する軍隊への食料供給を目的に捕獲されたというが、1回に数百頭単位の仕事といい、2万頭の根拠は見いだせなかった。

・北海道周辺海域でのニホンアシカの捕獲

北海道庁の統計書の項目は、アシカ科の動物の産出の項目はど統一されておらず、また古くからトドとアシカの名称には混乱が見られたことから（中村、1994；1997）

今回調査した統計の「海驢」と「海馬」の項目には、トドとニホンアシカが混在していた可能性が考えられた。

この調査でアシカの捕獲が継続して記録された地域は、択捉島と渡島半島であった。このうち択捉島については、トドが分布しており、トドを排除してニホンアシカの補角を直接支持する証拠は見いだせなかった。

一方、渡島半島南西部については、1980年代に行われた聞き取り調査では渡島半島南西岸でトドはほとんど目撃されておらず（山中ら、1986）、1897年に開催された第2回水産博覧会では北海道松前郡雨垂石村から「海驢皮」が出品されたことから（農商務省、1899）、同地でニホンアシカが捕獲されていた可能性が考えられた。しかし、50kmほど北上した江差町にはかつてトドが上陸場があったことから（山中ら、前出）、統計に現れた「海驢」がトドであった可能性も否定できず、今後の課題に残された。

引用文献

- 板橋守邦. 1989. 北の捕鯨記. 北海道新聞社. 札幌.
- 伊藤徹魯・宿野根猛. 1986. ゼニガタアザラシの生息数と生息環境. 和田一雄他編. ゼニガタアザラシの生態と保護, 18-58. 東海大学出版会. 東京.
- 犬飼哲夫. 1942. 吾が北洋の海豹（1）,（2）. 植物及動物, 10(10) : 37-42, 10(11) : 41-46.
- 犬飼哲夫. 1968. トド雑記. 哺乳類科学, 16 : 81-83.

- 岩手県水産試験場, 1955. 突棒漁業. 岩手県漁業の実相(第3輯雑漁業編), 1-9. 岩手, 大蔵省, 1885: 開拓使事業報告第3編物産. (復刻版: 北海道出版企画センター, 1983.)
- Ohsumi, S., 1972: Catch of Marine Mammals, Mainly of Small Cetaceans, by Local Fisheries along the Coast of Japan. Bull. Far Seas Fish. Res. Lab., 7: 137-166.
- 大槌町漁業史編纂委員会, 1983. 大槌町漁業史. 大槌町漁業協同組合. 岩手.
- 粕谷俊雄・宮下富夫, 1989. 日本のイルカ漁業と資源管理の問題点. 採集と飼育, 51(4). 口絵150-151, 154-160.
- 片山房吉, 1937: 大日本水産史. 農業と水産社, 東京.
- 川上健三, 1972. 戦後の国際漁業制度. 大日本水産会, 東京.
- 海洋漁業協会, 1942. 時事解説・膾炙獣猟業の再開. 海洋漁業, 7(12), 77-84.
- 菊地慶一, 1973: 白いオホーツク. 創映出版, 札幌.
- 木村金太郎, 1940: 海豹島の膾炙獣と「ロツベン」島. 糧食研究, 170: 28-41. 糧食研究会, 東京.
- 鋸南町史編さん委員会, 1969. 鋸南町史通史編(改訂版1995).
- 内藤靖彦, 1971: アザラシ産業の紹介. 鯨研通信, 238: 49-52. 鯨類研究所, 東京.
- Naito, Yasuhiko & S. Konno, 1979: The Post-Breeding Distributions of Ice-Breeding Harbour Seal and Ribbon Seal in the Southern Sea of Okhotsk. Sci. Rep. Whales Res. Inst., 31: 105-119. Whales Res. Inst., Tokyo.
- 中村一恵, 1994: ニホンアシカの復元にむけて(10), アシカ島・トド島の分布ーアシカ類地点名の考察ー. 海洋と生物, 95: 493-501.
- 中村一恵, 1997: ニホンアシカの復元にむけて(14), 日本の近い現代におけるアシカ類とその地理的分布. 海洋と生物, 99: 327-335.
- 日本海洋漁業協議会, 1951. 一九四〇年の漁業実績ー特別委員会報告書ー. 日本海洋漁業協議会, 東京.
- 日本捕鯨協会, 1944: 日本捕鯨協会捕獲統計簿自明治四十四年現在至ル. 日本捕鯨協会, 東京.
- 日本冷蔵函館支社, 1948: 昭和二十三年度海豹漁業報告. (水産庁中央水産研究所図書室蔵) 農商務省水産局, 1899. 第2回水産博覧会審査報告. 農商務省, 東京. (再録: 竹内賢士, 1999: 捕鯨船, 26.)
- 農商務省水産局, 1913; 千島及海豹島. 農商務省, 東京.
- 農商務省水産局, 1918; 遠洋漁業奨励事業成績, 農商務省, 東京.
- 竹内賢士, 2000: 近代捕鯨史のなかの北海道. モーリー, 2: 31-35. 北海道新聞野生生物基金, 札幌.
- 平島安雄・大野新一郎, 1944. 網走地方の海豚漁業. 北水試月報, 1: 82-90.
- フリーマン, M., 1989. クジラの文化人類学ー日本の小型沿岸捕鯨ー. 海鳴社, 東京.
- 北海道庁, 1923: 第33回北海道庁統計書第2巻. 北海道.
- 北海道労働科学研究所, 1950. 小型捕鯨労働事情. 研究調査報告「北海道漁業労働の実態3」, 24: 33-62. (北海道立図書館蔵)
- 前田敬治郎・寺岡義郎, 1952: 捕鯨 附日本の遠洋漁業. いさな書房, 東京.
- 宮下富夫, 1991. 日本周辺のエシイルカ系統群とその漁業. 遠洋, 81: 1-4.
- 山内生作, 1952. 突棒漁業. 普及パンフレット第4号・日本沿岸の漁具漁法: 62-71.
- 山中正実・大泰司紀之・伊藤徹魯, 1986: 北海道沿岸におけるトドの来遊状況と漁業被害について. 和田一雄ほか編. ゼニガタアザラシの生態と保護. 274-298. 東海大学出版会, 東京.
- 吉池律雄, 1986: 海産哺乳類保護における法的・行政的方策. 和田一雄ほか編. ゼニガタアザラシの生態と保護, 386-396.
- 吉田主基, 1977: 日本のアザラシ産業の紹介. 遠洋, 27: 1-8. 水産庁遠洋水産研究所, 静岡.
- 和田一雄, 1974. オットセイ保護条約の成立をめぐるー猟師と行政府のからみ合いの側面からー. 水産科学, 19(2): 17-24.
- 和田一雄, 1997. ラッコ・オットセイ猟業の成立・変遷と資源管理論(1), (2). 野生生物保護, 2(2): 93-120, 2(2): 93-120.
- 和田一雄ほか, 1999. トドの保全論. 大泰司紀之・和田一雄編. トドの生態回遊と保全, 249-313. 東海大学出版会, 東京.

付録：関係資料の所在と内容

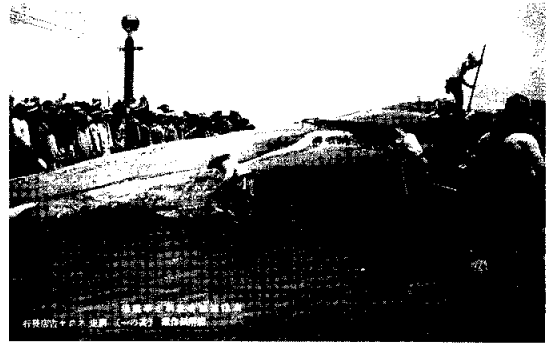
捕鯨基地の跡地・関連史跡，写真及び資料の所在について知り得た範囲で記述した。

1) 捕鯨基地の跡地・関連史跡

- ・東洋捕鯨網走事業場跡（網走市）
ウインチ台，塩蔵肉用半地下タンク（推定）（下道吉一氏らの調査による）。
- ・日東捕鯨霧多布事業場跡（浜中町）
鯨体引揚用スロープ，ウインチ用煙突。
- ・志野徳助顕彰碑（厚岸町）
真龍神社境内。

2) 写真及び資料

- ・網走市立図書館
写真，絵はがき，新聞記事スクラップ。
なお，同館所蔵の絵はがき「網走の鯨」の被写体が，シロナガスクジラと判断された。これは（財）日本鯨類研究所の大隅理事長の鑑定によるもので，撮影場所も三好秀志三好捕鯨代表取締役の記憶から網走港の解剖場と判断された（写真1）。なお「沿岸捕鯨統計」では，網走でのシロナガスクジラの陸揚げは記録されていない。
また，年代についても同一風景を撮影したと，考えられる別葉の写真から，1932年（昭和7）と判断した。
- ・網走市立郷土博物館
50mm捕鯨砲（三好捕鯨（有）の捕鯨船第八高島丸搭載のもの），ナガスクジラヒゲ板製靴べら（鮎川産）。
- ・紋別市立郷土博物館
トド撃ち用散弾銃（浜田一幸氏使用のもの）。
- ・釧路市立図書館
道東貿易懇話会「アルバム」，市政施行70周年記念誌「目で見える釧路の歴史」，釧路港開港百年～開港からみる港のあゆみ～，釧路港の変遷，昭和38年版釧路港案内（以上写真収録・施設記載地図）。
- ・厚岸町立海事記念館
捕鯨砲捕鯨銃90mm・50mm，セミ鯨髭板，ナガス鯨髭板，鯨骨刀，マッコウ鯨歯，地図「浜中町霧多布市街」（1963年発行・鯨体処理場記載）。
- ・浜中町郷土資料室



1932年網走で陸揚げされたシロナガスクジラの解剖風景が搭載された絵葉書

- 捕鯨銃90mm・50mm，セミ鯨髭板，ナガス鯨髭板，鯨骨刀，マッコウ鯨歯，写真「日東捕鯨捕獲シロナガス鯨」（1951年・全長24.7m），地図「浜中町霧多布市街」（1963年・鯨体処理場記載）。
- ・浜中町役場ロビー
マッコウ鯨歯，ナガス鯨髭板，シロナガス鯨髭板，鯨油製品瓶詰，ナガス油瓶詰，脳油瓶詰，鯨肉粕粉末肥料，大和煮缶詰。
- ・根室市郷土資料保存センター
絵はがき，捕鯨銃。
- ・北海道立文書館
開拓使ラッコ猟関係簿書件名簿，同簿書綴，開拓使・北海道庁作成の統計資料。
- ・北海道立図書館
北海道作成の統計資料，絵はがき。
- ・北海道大学水産学部水産資料館
アメリカ式捕鯨器具。